

英 独 文 法 の 比 較

中 原 義 浩

I 序 説

日本で独語を学ぶものの大多数はすでに英語を知っている人達である。そして彼等が独語を学習するとき、その部分部分に於て意識するとしないうちに拘らず英語を心に置き、その助けを借りている。従ってこの両者の差異を体系的にはっきりと理解させるならば、独語の習得はよりスムーズに行われ、また逆に英語の理解を一層深めることができるであろう。特に現代英語に於ける例外的表現の中には古い時代の名残を留めているものが多いが、それらは独語文法によって理解し得る場合がかなりある。というのも元来英語と独語とは同じゲルマン派言語から分れた姉妹語であり、その中で英語は後述するように激しい変化を経て来ているのに反し、独語は変化をしながらも比較的古い形式を受けついで来ているからである。

だが我々が漫然と思う場合、英語は独語よりむしろフランス語に近いような感じを受ける。所で現在ヨーロッパ諸国で使われている殆んどすべての言語は、有史以前に存在したと考えられるインド・ヨーロッパ語をその共通の祖語とし、それからそれぞれ地域的方言化と時代的変遷を経て今日に至っている。そのうち英語と独語は先にも述べたようにゲルマン語派に属し、フランス語はイタリア語などと共にローマン語派に属している。それにも拘らず英語がフランス語に親近感をいだくのは、例の1066年に於けるノルマン・コンクエストに帰因している。この年フランスのノルマンデー侯ウィリヤムは英国を征服し自から英国王となった。この歴史的な大事件はその後の英国人の生活、習慣、制度など全般にわたって非常な影響を及ぼしたが、言語もまたその例にもれず大きな変化を受けた。殊に単語の面では数多くのフランス語を取り入れ、更にフランス語を介してラテン語やギリシャ語にまで手をのばし、単にとり入れるばかりでなくこれらをよく消化しておびたしい混種語を作りだした。外来語に英語の接頭・接尾語を付けるばかりでなく、英語に外来語の接頭・接尾語を付けるにまで至った。

(仏+英) simpleness, return, dislike

(英+仏) endearment, shortage, drinkable

このため現代英語の単語は本来のゲルマン語系がわずかに 35% にすぎない。が日

4

1

•

II 分析的と総合的

我々が独語を学び始めて先ず驚きかつ苦しむのが、名詞を中心にして冠詞や形容詞が性・数・格に応じて語尾変化することである。更に動詞の語尾は直接法（叙実法）、命令法、接続法（叙想法、仮定法）に於てその主語の人称・数に応じて変化する。英語も名詞の2格（所有格、属格）、複数形、動詞の三人称単数現在にそれぞれ～&が付くが、それはもはや殆んど変化語尾とは気づかれない程である。英語も古くはむしろ独語以上に複雑な語尾変化をしたものだが、次第にそれらの語尾は統一され、消失していったように簡単なものとなった。この形態の単純化こそは英語のもっとも基本的な特質という。といってもそれが英語だけに見られるものというのではなく、独語も古くから同様の傾向を見せて来ているが、英語はその程度がはるかに進んでいるという意味である。ただしこれを文法的にいいかえるならば、語と語との関係をしめすのにその語の屈折をもって表わす総合的言語から、それらの関係を前置詞や助動詞など他の語をもって表わす分析的言語へと進んで来たのである。

では英語に特にこのような激しい変動が起ったのはなぜか。元来言語は時代とともに音声に変化を生ずるものであるが、それが屈折的言語であり、その変化語尾に音声変化が起った場合には、必然的に文法上非常な混乱を来す。そこでこれを切り抜けるために屈折語尾以外のもので表現しようとするし、また混乱をまぬがれた語尾を一般化せんとする。以上の音声変化のほかに分析的傾向を促す要因としては、そしてそれが英語を他より一層はげしく分析的傾向へ走らせたのであるが、異方言、あるいは異国語との混合がある。先にのべたように英語はゲルマン語派の中の低地ドイツ語から分れたものだが、5～6世紀にかけてこの低地ドイツ語を語るアングロ、サクソン、ジュートの三民族が大陸から英国島に渡って来た。この彼等の言語が現代英語の源となっているのだから、英語はその生い立ちから混合的要素を有していた。ついで8世紀頃より、同じゲルマン系言語を語るデーン人、スカンデナヴィヤ人が英国島に侵入しはじめ、1017年にはデーン人クヌートが英国の王位を奪うに至った。そして1066年のノルマン・コンクエストとなってローマン語派のフランス語が導入されることになった。このような異方言や異国語の混合が屈折的言語に起れば、当然その変化語尾は混乱し、あいまいとなり、あるいは無意味な存在となって言語はしだいに分析的傾向を強めざるを得ないのである。

1. 名 詞 的 変 化

名詞に関して英語のもっとも著しい特徴はその性を放棄した点である。独語には男・女・中の3つの性があるが、他のヨーロッパ語を見渡しても名詞に性の区別がないのはただ英語だけである。名詞の性が生物のみならず、無生物から抽象的概念に至るまで存在することは、その成立した歴史的段階に於てはともあれ、現在の我々にはもはや理解しがたく、無用の長物と化し、時にはその不合理にとまどっている場合（独語の *Mädchen* は中性、これを *es* や *sie* でうける）もあるが、英語はこれをのり越えて合理的ですっきりとした平明な言語を作り出した。もっとも名詞を代名詞で受けるときには、英語でも男は *he* 女は *she* と自然の性に一致させ、その他は無性として *it* で受けている。そして無生物であっても、太陽 (*sun*) を *he* で、月 (*moon*) を *she* で受けたり、その他擬人的性をもって表わす場合もある。名詞の数については、⁽ⁿ⁾ ⁽ⁿ⁾ ["] 複数の作り方に英語の方は原則的に *~s* しかないが、独語には *~*, *~e*, *~er*, *~en* の4種類がある。ここでも英語は非常に単純化されてきたが、若干の不規則なものがあるのは昔しの名残りである。

単複同形	<i>sheep</i> → <i>sheep</i> ,	<i>fish</i> → <i>fish</i>
変 母 音	<i>man</i> → <i>men</i> ,	<i>foot</i> → <i>feet</i>
<i>~ en</i>	<i>ox</i> → <i>oxen</i> ,	<i>child</i> → <i>children</i>

children に至っては二重の複数形をとっている。つぎに名詞の格をみると、独語の4個に対して英語は3個である。つまり独語の3格（与格）と4格（対格）が英語では目的格として1つに統合され、そのためかつての3格をしめすのに前置詞の *to* や *for* が用いられるようになる。

He writes his teacher a letter.→*He writes a letter to his teacher.*

英語のかつて3格を目的語とした動詞であったものは、こうして大部分が他動詞となっているが、*listen to*, *belong to* などのように前置詞 *to* を伴うものはその名残りである。また形容詞に於ても次のような *like* の用法はかつての3格を目的語とした形容詞の名残りである。

In these points he is very like my father.

Er ist darin meinem Vater sehr ähnlich.

次に2格（属格，所有格）について述べれば、独語の男性・中性名詞の大部が *~(e)s* をとり男性の1部分 *~(e)n*，女性と複数では語尾がつかない。これに対して英語では *~'s*（古くつかわれた *~es* の省略形）に統一された。がこれと並行して英語はフラ

ンス語の影響もあって、前置 of をこれに代える分析的方法が非常に発達した。(勿論独語も前置詞 von を用いる傾向が生じてはいる。) そのため以前 2 格を 目的語とした動詞または形容詞の中には think of, afraid of など前置詞 of をともなうものがあり、独語にみられるような 2 格の副詞的用法にあたるものとして、of an evening, of a truth, of course などがあり、always, sometimes などの ~s はその名残りである。

冠詞の変化は本来名詞の性・数・格に応じて行われ、名詞の文法的関係を助ける役目を果しているが、英語では冠詞も名詞の性と共にその変化を完全に廃止してしまった。独語では承知の如く厄介な変化をもっており、更に定冠詞、不定冠詞に準じて指示代名詞や所有代名詞が同様の変化を行う。一層厄介なのが独語の形容詞の変化である。前後に置かれる冠詞類と名詞によって強・弱・混合と 3 様の変化をしなければならない。勿論英語ではきれいにその語尾をとりはらってしまっている。このため英独両者の形容詞の使い方に多少の差ができてきた。形容詞を伴う名詞を反復する場合、独語では形容詞の変化語尾があるため 2 度目の名詞を省略するが、英語ではそれができないので代名詞の one を用いる。

His life is a happy one.

Sein Leben ist ein glückliches.

また形容詞の名詞化に於ても、独語にあっては、der Alte (男の人)、die Alte (女の人)、die Alten (人々)、das Alte (事物)と使い分けられるが、the poor, the true など全体的人間や事物を表わし得ても個別的人間や事物は表わせない。ただ the deceased や the Almighty などには昔の名残りをとどめている。また目的語や副詞を含んだ分詞形容詞の句が名詞を修飾する場合、独語では冠飾句として冠詞と名詞の間にはさむことができるが、語尾変化を失った英語では名詞の後にまわされる。

The book lying on the table is a Greek grammar.

Das auf dem Tische liegende Buch ist eine griechische Grammatik.

形容詞に関しては以上のべた格変化語尾のほかに、比較変化語尾についてもふれなければならない。独語では ~er, ~(e)st が全ての形容詞に適用されるが、英語では ~er, ~est の語尾による方法のほかに、副詞 more, most による分析的方法がフランス語の影響もあって発達したため、この 2 つの方法が互いに分野を分けあって共存する。なお独語にも分析的用法が存在するが、同一のものが有する 2 個の性質をくらべる特種な比較の用法となっている。

2. 動 詞 の 変 化

基本形の不定詞からいうと、独語はすべて *~en* か *~n* の語尾をもっているが、英語は大部分が語尾を失い語幹だけになっている。例へば独語の *finden* は英語で *find* となっている。ただ英語で稀に *~en* を有している *happen* や *listen* などは昔の多残りであり、*take*, *write* などはその移行形とみられる。また名詞や形容詞から動詞を作る場合には *frighten*, *weaken* など古形の類推から *~en* がつけられる。また、過去及び過去分詞では、独語に強・弱・混合の3種類の変化があるが、英語では幹母音の変化を行う強・混合変化動詞の数が減じ、語尾変化のみで表わす弱変化に統合されて来たので、規則動詞(弱変化)と不規則動詞(強・混合変化)に大別されるようになった。独語でもこの傾向にあり、強・弱・混合の分け方にどれ程の効果があるのか疑問視されている。なお過去分詞を示めす前綴の *ge~* は英語では完全に消失した。

次に人称変化語尾であるが、独語では直接法(叙実法)、命令法、接続法(叙想法、仮定法)ともそれぞれ主語の人称・数によって語尾変化を行っているのに反して、英語は *be* 動詞を除いては直接法・現在・三人称・単数の *~s* が存在するのみである。特に接続法ではわづかに残っている *be*, *were* も直接法の *is* や *was* を用いる傾向にあり、現在・三人称・単数に *~s* をつけぬ用法(この無語尾のためにかえって直接法と区別されているわけだが)も、*God bless you!* *God save the King!* など一定の文句に限定される。このように英語では接続法がおとろえたので、これに代って助動詞の用法が発達する。独語も接続法は使われなくなりつつあるが、英独に於ける差異の主なものを以下に示めす。

〔間接引用〕

He said his master was not at home.

Er sagte, sein Herr sei nicht zu Hause.

英語では直接法が用いられており、またこの際に見られる時称の一致が独語には見られないのは、独語の方が時代とともにそれを放棄してしまったからである。

〔命令・勧誘・願望〕

Let no man deceive himself.

Niemand betrüge sich selbst.

Let us speak gently.

Sprechen wir leise!

May the New Year bring you much happiness.

Das Neue Jahr bringe dir viel Glück!

二人称の命令には当然命令法が用いられるが、他の人称に対しては接続法が用いられる。ただし独語の二人称には敬称 *Sie* があるが、これは 元来三人称複数の *sie* であったため、やはり接続法を用いる。また英語の接続法が助動詞に置きかえられている点に注意すべきである。このほか目的文や認容文に於いても英語では助動詞が用いられる。

〔假定〕

If we had time, we would do it.

*Wenn wir Zeit hätten, { so täten wir es.
so würden wir es tun.*

假定を中心にした非現実的な事柄に対しては、直接法の過去を転用した形の接続法(独語の接続法第2式、英語の假定法過去)が用いられるが、この際独語の動詞には変音を伴ったものが数多くあるのに対して、英語は *were* の1語だけが特殊な形として残っている。また仮定的条件文の結論をしめす主文に於て、独語には助動詞 *würde* を使用する条件法が並用されているが、英語ではこれに相当する *would*, *should* の用法だけが用いられ、助動詞を用いない他の用法は姿を消した。

助動詞の発達によって生じた形態については、このほか完了形の助動詞として独語に *haben* と *sein* があり、英語では殆んど *have* が用いられて、*be* は完了の結果である状態を示めす場合にのみ僅かに残っている。(Spring has come, winter is gone.) 未来形の助動詞は逆に英語の方に *shall* と *will* があってその用法が厄介だが、この点独語は一步進んで *werden* に統一された。また独語になく英語にのみ発達したものとしては、進行形の *be* と強調の *do* とがある。(do にはこのほか後述するように疑問文、否定文に於ける *do*, 代動詞の *do* などの用法がある)。

Now he is sitting there all alone.

Er sitzt da nun ganz allein.

I do love her.

Ich liebe sie wirklich.

3. 語 順

語と語との関係を示めす変化語尾が消失するにつれて前置詞や助動詞が発達するが、さらにこれを補うのが語順の固定化である。従って英独を比較してみた場合、独語の語順は割合自由であり、主語や目的語が文のどこにあってもその変化語尾で見分ける

ことができる。例へば *The cat killed the bird.* という文を、独語では *Die Katze tötete den Vogel.* とか或いは倒置して *Den Vogel tötete die Katze.* ともいえる。英語でこんなことをしたら意味が混乱してくる。こうして英語では基本的な S+V+O の語順が確立され、一般に倒置は行われなくなった。here, there, hardly などの後で見られる倒置は古い用法の名残りである。

主語を文頭に固定せんとする英語のこのような傾向は、前置詞を伴った疑問文や関係文に於て前置詞を文尾に廻すようになり、さらにこの際の疑問代名詞を主格に変えることまで行われている。

Of whom are you thinking? → Who are you thinking of?

An wen denken Sie?

また S+V の語順をくづすまいとして、助動詞 do による疑問文が作られるようになり、否定文もさまざまな変遷を経て同様の形式を取るに至った。ただし今日でも目的語をとらぬ短い固定的表現には I care not. I doubt not. などの古い形が残っている。

Do you come with me?

Kommst du mit mir?

She did not go to school.

Sie ging zur Schule nicht.

次に V+O の関係を緊密に保つための現象として、不定の時を示す always, often, sometimes などの副詞は主語と動詞の間にはさまれる。

I sometimes received a letter from him.

Ich erhielt manchmal einen Brief von ihm.

完了形に於ける過去分詞の置位についても注意を要する。現代の英語では I have written a letter. と書かれる完了形も、以前は I have a letter written. と過去分詞が文尾に置かれ、丁度使役または経験受動の形態と同じであった。(I had a new suit made.) つまり written は動詞というより letter に対する形容詞的立場にあった。しかし have が他動詞としてよりは助動詞として発達するにつれ、written が本来の動詞的働きを取りもどして目的語が後へもって行かれ現在のような語順となった。勿論独語では Ich habe einen Brief geschrieben. と昔ながらの形態を保っている。これと同じようなことが不定詞の位置に於ても見られるし、独語の副文(従属節)に於ける定動詞の後置という現象も英語では消滅してしまっている。

I shall call on you, as soon as I am disengaged.

Ich werde Sie besuchen, sobald ich frei bin.

4. 複 合 語

独語には英語にくらべて綴りの長い語が非常に多い。これは独語に複合語が多いからであり、また複合語の場合独語が一語としてまとめてしまうのに対して、英語は分析的傾向を強めて各語を切り離し独立的にあつかうようになったからである。例えば複合名詞については、英語には bookcase とか sportsman など古い複合法によるものもあるが、pocket money (*Taschengeld*), sister language (*Schwestersprache*) などのように二語に分けられて書かれることも多い。これは形容詞の変化語尾が失われたことも手伝って名詞が形容的に用いられるようになったためである。この点他のヨーロッパ語にはみられない英語の特徴である。

また複合動詞については、独語では副詞を主体として前置詞、形容詞、名詞など本来独立して用いられる語の多くが動詞と自由に結びついて分離動詞、分非分離動詞を作り出している。だがこのような複合語は英語では今日 over～ と under～ (overwork, overtake, understand, undertake) のみに比較的自由的な結合をゆるしているが、その他は特定の語にのみ固定してしまった (upset, fulfil, outlive)。そして一度結びついてしまったこれらの語は独語の分離動詞のように条件に応じて二語に切り離されて書かれることはない。例えば独語の *aufgeben* は現在の時称に於て *Ich gebe es auf.* と書かれる。所でこれを英語で表わせば *I give it up.* となるがこの場合の give と up を複合語として upgive と書くようなことは英語ではない。だがこれも一種の複合語とすれば、この種の複合語が英語には数多く存在し、新らしく作り出されつつある。

break out, set up, take over, set off なお upset—set up, overtake—take over の如く、意味の相違によって一語或は二語と書かれる語は、丁度独語の分非分離動詞に相当する。

前置詞と他の語との結合形も独語には非常に多く見られるが、英語では古語や雅語として僅かに用いられるにすぎない。

〔前置詞＋人称代名詞〕

(英) 古語 therewith, therefor (独) *damit, daranf*

〔前置詞＋疑問詞〕

(英) 古語 wherewith, whereof (独) *womit, woran*

〔前置詞＋関係代名詞〕

(英) 古語 *whereof, whereon* (独) *wovon, worin*

独語も前置詞と関係代名詞との結合形は現在あまり用いられない。

III 敘事的と敘情的

これまでは英独文法の差異について、表わされた形式を中心に見て来たが、今度は表現する人間の側からながめてみたい。勿論両者は表裏一体となって相互に作用しているから、判然と区別して考えるのは不可能なことであって、ただ視点を置きかえることによって理解を容易にしようとしただけのことである。ともあれ英語では具体的な、客観的な表現が好まれ、また無駄のない簡潔な表現が愛される。これに対して独語は観念的であり、主観的であって、また含みのある長い文が多い。従って英語は事実を正確に叙述するのに適した敘事的言語といえるが、独語は個人の感情をまじえた敘情的言語といえよう。

1. 具 体 的

漠然としたものを示す不定代名詞の *es* を主語にした非人称動詞が独語には多数あって、自然現象ばかりでなく、人間の感情や感覚を表わしている。英語では *it* を主語にしたこのような非人称動詞は殆んど自然現象を表わす場合にのみ限られてしまって、感情、感覚を表わす場合は用いられなくなっている。(古くは *It likes me not.* などの用法があった。)自然現象を表わす場合ですらも具体的主語を求める傾向が強くなっている。

It is fine. → *The weather is fine.*

It is blowing hard. → *The wind is blowing hard.*

人称動詞を非人称動詞的にあつかう独語の非人称構文に於ても、英語では人称構文に転じている。

Some one knocked at my door.

Es klopfte an meine Stubentür.

冠詞の用法に於ても、総称的な意味を表わす場合には、独語では普通名詞のみならず抽象名詞、物質名詞も観念的な表現である定冠詞(～なるものはの意)が一般に用いられる。英語では抽象名詞、物質名詞は実際に即して合理的に冠詞をとらず、普通名詞も具体性をおびた無冠詞の複数が好んで用いられる。また近親者や身体の部分を示す時、独語では多く定冠詞を用いるが、英語では具体的に所有代名詞を使用する。

He wiped his mouth with his hand.

Er wischte mit der Hand den Mund.

また身体の部分を表わす場合、英語の所有代名詞に相当する表現として独語にはその所有者を3格で示す、いわゆる所有の3格という用法があるが、主観的な感情のにじんだ表現である。もっとも英語にも look や stare の後では、独語の所有の3格にあたる人称代名詞が用いられて昔の名残りをとどめている。

He looked her in the eyes, then he pressed her hand.

Er sah ihr ins Auge, dann drückte er ihr die Hand.

2. 簡 潔 性

英語にはいろいろと省略や短縮によって文を簡潔にしているが、再帰代名詞の用法にもよくそれが現われている。独語では再帰代名詞が非常に多くの動詞と結びついて再帰動詞を形成しており、自動的表現や受動的表現の手段として用いられているが、英語では再帰代名詞 oneself が重苦しく感じられて次第に省略されていったので、再帰動詞の数は少なくなってしまった。そのため英語では元来他動詞であった再帰動詞の多くが自動詞に転じ、一方態動受動態なるものの発達をうながした。

〔他→自〕

He has changed his lodging.→The scene suddenly changed.

Er hat seine Wohnung verändert.→Die Szene veränderte plötzlich.

〔他→受〕

He sells the book.→The book sells well.

Er verkauft das Buch.→Das Buch verkauft sich leicht.

副文（従属節）は長たらしいので英語は独語ほど頻繁に用いられず、関係文も関係代名詞をつかわない形式（This is the book I bought yesterday.）が英語には存在するが、独語にはない。そして副文を短縮した分詞構文が英語では非常に発達しているのも、簡潔な文を好む現われである。このほか英語には代動詞の do（Do you tell him?—Yes, I do.）が生まれ、I'm, I'd, he's, don't, aren't などの省略形も非常に多い。

3. 静と動の関係

受動態は独語では英語ほど頻繁に用いられない。それだけ英語は静的に客観的な事実を見つめる立場に立っており、独語は動的に主観的な感情を行為そのものに向けて

いるわけである。所でこの受動態に、英独両者の間の差異を表わしている 2 つの問題がある。1 つはすでにのべた如く格変化語尾消失の結果、英語は 3 格（与格）と 4 格（対格）が目的格に統一されたため、直接目的語だけでなく、間接目的語も受動文の主語とすることが出来るようになったことである。

He gave me a book. → A book was given me by him.

→ I was given a book by him.

Er gab mir ein Buch. → Ein Buch wurde mir von ihm gegeben.

今 1 つが特にこの項目に関連する問題である。独語は受動態に動作の受動として *werden* + 過去分詞、状態の受動として *sein* + 過去分詞という 2 つの形式をもっているが、英語は *be* + 過去分詞でいずれの場合も表わしている。（英語も古くは *become* + 過去分詞で動作の受動を示していたが、*be* + 過去分詞に統一されてしまった。そしてこの行き過ぎを補うために再び *get*, *become*, *grow* + 過去分詞の形式が用いられはじめている）このように独語は静と動の関係を明瞭に区別しようと努力しているのに、英語はこの点ルーズなのである。

(1) The gate is shut by ihm. *Das Tor wird von ihm geschlossen.*

(2) The gate is shut the whole day. *Das Tor ist den ganzen Tag geschlossen.*

また独語の 3・4 格支配の前置詞 (*auf*, *in*, *unter*) も同様に静と動の関係を区別しているが、格語尾を失った英語では *in* と *into* に僅かにその区別を示している。ただし動詞が運動を表わすような動詞 (*put*, *cast*, *fall*) では *in* がそのまま使われているのは昔の名残りである (*Put the key in your pocket.*)。更に独語には動作の方向を規定する副詞 *hin* と *her*（及びそれと複合した *hinaus*, *herein*, *wohin*, *woher* などの多くの語）があるのも静と動の関係を明確化しようとする表われである。